

鯨井俊彦先生のご定年に寄せて

— 懐かしい日々 —

佐々井 利 夫

鯨井俊彦先生のご定年によるご退職は、よく言われることであるが、私にとって年月の経過の早さを改めて感じさせるのである。先生からのご交誼を得た年月は、明星大学における37年間だけでなく、早稲田大学大学院時代を加えれば43年間になる。その間、先輩として同僚として貴重なご指導、ご援助をいただき、また様々なエピソードを紡いできた。深い感謝の念を込め、いくつかの思い出を回想しながら送別の辞としたい。

まず、大学院時代の思い出を二つ取り上げたい。一つはトランプである。修士課程に入った私は、そこで博士課程に在籍されていた鯨井先生の面識を得ることとなった。また、同期に修士課程に入った現明星大学学長の小川哲生先生とも知り合うのだが、小川先生の下宿が大学の裏門のすぐ近くにあり、授業の合間によく出入りしたものである。しばしば鯨井先生もご一緒にそこで、いつもトランプのセブンブリッジを簡略化した遊びを飽きもせず繰り返した。三人がその後同じ職場で長い人生を共にするとは当時夢にも思わなかったのである。もう一つの思い出は、夏休み、三人が他の仲間と共に尾瀬に遊んだことである。われわれのゼミの指導教授であり、その後明星大学2代目学長となられる児玉三夫先生も民宿に一泊され、上述した例のトランプゲームを深夜までお付き合いされたことも懐かしい。

鯨井先生の明星大学におけるご経歴は別紙にある通りであるが、図書館で仕事を共にした期間も長かった。私は閲覧・参考業務を担当したが、先生は貴重図書の管理を主とされた。当時の明星大学図書館はシェイクスピア資料やリンカーン資料をはじめ西洋古版本を中心とした貴重書の収集で知られ、大学の広報の一翼を担っていた。イギリスの当時では前首相であったキャラハン氏やアメリカのマンスフィールド駐日大使など、著名人がしばしば来館され、先生はその都度対応に追われていた。目録の刊行や大学内外での展示会も多かったが、先生はそうした業務において中心的な役割を果たされた。3冊出されている『シェイクスピア目録』の1冊目のときは、締め切りに間に合わせるために飯田橋の印刷所でごく短期間に3,4回徹夜で校正作業したこと、銀座のミキモトであったシェイクスピア資料展に向けての準備で夏休みを犠牲にしたこと、テレビ番組「世界ふしぎ発見」にシェイクスピア戯曲集を提供したこと、NHKの朝の番組での図書館紹介のために早朝出勤したこと、各種の貴重書の展示会に参加したこと、イギリスの古書業者とのやりとり、貴重書を絵柄としたカレンダーの作成、当時の児玉学長のお供での大阪、芦屋への出張など、図書館での思い出は尽きない。先生は、明星大学が発展する時代に教学だけでなく事務の面でも多大の貢献をされたが、そのことを学内において知る人が少なくなったのは残念である。

ご研究については、W.T.ハリスの教育思想の研究から始められている。ハリスは、19世紀から20世紀にかけてのアメリカの教育思想や教育行政に優れた足跡を残した人物であり、私の研究対象であるデューイの無名時代、その才能を見出した人物としても知られている。ハリスのご研究からその後カリキュラム論、授業論へと関心を広げられた。先生との研究領域が近いこともあり、しばしば資料面での適切なアドバイスをいただいたものである。私にとっては身近にレファレンス・ライブラリアンがいるようであり、この点については特別に謝意を表したい。二人とも日本デューイ学会や教育哲学会に所属し、学会で行動を共にすることもあった。いつのことだったか、滋賀県立大学での学会での折、合間を縫って彦根城や長浜、そして琵琶湖に浮かぶ竹生島に遊んだことがあった。秋の穏やかな日差しにきらめく湖面が記憶に鮮やかである。学会といえば、明星大学で日本デューイ学会が開催されたとき、先生が責任者として運営を支えられたこともご業績のひとつである。

教師としての先生は、学生にとっては優しいお父さんのイメージで受け止められていたようである。「僻地教育研究会」の顧問を長く務められ、合宿にもよく参加されておられた。先にご定年を迎えられた森下先生も一緒に、大学院生と共に石和温泉や箱根を楽しんだこともある。

先生は、野球が大好きで日本のプロ野球だけでなくアメリカの大リーグの動向にも深い関心を寄せられていた。小川先生や私も同様で、会えばよく話題に取り上げた時期もあった。また、三人とも実際に野球をすることも好きで、今の明星大学の職務状況では考えられないが、25年ぐらい前までは現在の26、27、28号館のある場所にあったグラウンドなどで、通信教育部の職員を中心に三人混じって毎日のように昼休みに三角ベースの野球、ソフトボールをした。炎天下や寒風の季節を問わず、多少の雨も厭わず熱心にボールを追っかけたものである。ここ数年は、気楽にボールを投げあうスペースが大学になくなったことを先生としばしば嘆きあうことになった。

回想のなかでは、すべては美化されていきがちである。過重な負担に悩まれたことも多くあったと推測されるが、いつも先生は内面の葛藤を表に出さず、黙々と対応されてきた。これからは、ご自身のご研究、ご趣味に自由に打ち込まれると思われる。最近、これからどうします？とお聞きしたら、孫と遊ぶのが楽しみと言われた。長い年月を支えられた奥様とともに豊かな日々を送られることを切に願う次第である。